

# 劇団さくらっ子

## 平井ゆみさん、三科恵美子さん、山中淑子さん

劇団さくらっ子は、主に男女共同参画に関するテーマを寸劇という形で発表し、鑑賞者が各テーマについて考え、理解を深めることを目的として活動するグループです。

平成 21 年度には、山梨県男女共同参画団体賞を受賞されています。代表の平井ゆみさん、顧問の三科恵美子さん、脚本の山中淑子さんにお話をうかがいました。

まず劇団さくらっ子設立の経緯からお聞かせください。

平井 劇団さくらっ子は、甲府市女性市民会議（現在の甲府市男女共同参画推進委員会）の第 6 期で共に学び、活動した女性たちを中心に結成したグループです。メンバーの出入りもありましたが、現在は 11 名で活動しています。今年で活動 11 年目になります。様々なテーマの寸劇を通して、男女共同参画社会を推進することを主な目的としています。演劇経験のない私たちが「劇団」と名乗っているのは、寸劇を通して男女共同参画社会実現をめざしたいという強い思いからです。

山中 女性市民会議のメンバーは公募と自治会推薦で 40 名前前後が選ばれます。1 期 2 年の任期でグループに分かれて活動します。私たちが女性市民会議で活動した当時は、男女共同参画と言う言葉も一般的ではなく、男女平等、あるいは女性の地位向上といった言葉が使われていたように思います。劇団さくらっ子の活動をスタートした平成 16 年前後から、次第に男女共同参画という言葉が聞かれるようになりました。

皆さんの活動が寸劇というスタイルになった経緯と現在の状況をお聞かせください。

三科 女性市民会議では 2 年間の活動のまとめとして各グループが発表をおこなうのですが、私たちのグループでは寸劇を発表することにしました。タイトルは『きっと世界は晴れるから』。メンバーの意見を基にして、その後も作品の脚本を担当している山中さんが中心となって書かれたものです。さくらっ子結成前ですが、私たちの第一作目と

言ってもよい作品です。

毎年 2 月に甲府市総合市民会館で行われる「甲府市民フォーラム」（現在は甲府市男女共同参画推進フォーラム）で大勢の方々の前で発表したのですが、思いのほか好評で、正直に言うと、スポットライトを浴びて気を良くした面もありますね。

平井 現在の公演ラインナップは、男女共同参画に関するものが 10 作品、その他に環境問題に関する作品が 3 作品、その他の社会問題を取り上げたものが 3 作品あります。

山中 もちろん男女共同参画に関する様々な課題について考えていこうとスタートしたので、男女共同参画が活動の中心テーマです。でも活動を続ける間に起きた社会問題も見逃すことはできません。

平成 19 年に環境問題を、その後、「オレオレ詐欺」や「食品ロス」などの社会問題を取り上げ、作品創りをするようになりました。『未来との遭遇』という環境をテーマにした作品では、環境コンテスト・若宮賞をいただきました。10 年を経て、「男女共同参画」「環境問題」「社会問題」が主要テーマに定まった感じですね。

平井 作品数が充実すると、一年間の公演回数も増加しました。年平均 12 公演、最大 20 公演くらいおこなった年もあります。それぞれ家庭や仕事がありますので、日程調整が難しいこともあるのですが。

三科 結成から今まで、様々な場所で様々な方に作品を観ていただきました。平成 19 年と 21 年には、NVEC（国立女性教育会館）のフォーラムで全国の皆さんにご覧いただきましたし、立川市にある国立昭和記念公園・昭和天皇記念館や晴海トリトンスクエアでの環境展など、県外でも演じてきました。



平井ゆみさん（左）、三科恵美子さん（中）、山中淑子さん（右）

山中 お声掛けいただいた話は可能な限り受けようというのが、メンバー全員の一致した考えです。

寸劇そのものは 30 分程度ですが、時間が許せばグループワークの時間を設けて理解を深めていただく作業をおこなっています。観て考える、話し合っ理解を深めるという流れはとても大切なことだと思います。

各グループにさくらっ子のメンバーを配置し、ファシリテータ役を担ってもらいます。例えば、防災をテーマにしたものなら東日本大震災等の経験もありますから課題についてイメージしやすくグループワークもスムーズに進むのですが、女性管理職やワークライフ・バランスなど複雑な問題を抱えたテーマでは、寸劇をご覧になった同士で議論が噛み合わなくなることがあります。よりよく理解していただくためメンバーがサポートしながら議論を深めます。

毎年、ぴゅあ総合フェスタでも発表いただいていますね。寸劇と言っても舞台道具や衣装の製作から音響機材の調達まで、メンバーの負担は経済的なこともふくめ、かなりのものだと思いますが。

山中 ぴゅあ総合フェスタでの寸劇は私たちの年間の活動の中でも大きな位置を占めています。

音響機材のような高価なものは、県の助成金制度を利用して揃えました。依頼団体から謝金をいただくことは殆どなく、基本的に自分達の活動基盤は自分達の努力でまかなうことにしています。機材をそろえた当初は、マイクケーブルの繋ぎ方など音響に関する知識も経験もなく失敗の連続でしたが、現在ではメンバーの半分が使えるようになりました。寸劇では場面転換の際、大きな布製の背景幕を張って、その裏でおこなうのですが、そうした幕類もメンバーが力を合わせて製作します。

「さくらっ子さんは個性的なメンバーが揃っているな」という印象があります。代表や会計、広報といった配役以外の役割分担はどのように決めていますか。

平井 代表任期は 1 年ですが、同じ人に何年もお願いしていた時期もあります。メンバーの中には家庭の事情などでそうしたことに時間が割けない方もいますので。実は私も本当はそう言って代表をお断りしたかったのですが…。

三科 役を任せられる事で大きく成長しますしね。適材適所で一人一役を心がけています。確かに個性的なメンバーです。だからこそ良い面だけをぶつけていく事で、活動が良い方向に向かうのでしょうか。お互いの気心がわかってきた

からこそできることだと思います。

演技面では指導者をお呼びしてアドバイスをいただければ、もっと質の高い演技ができると思います。でも観ていただいている方に私たちのメッセージを自然に伝えていくことを考えると、自らが工夫して役割りしたほうがよいのではと考えるようになりました。皆さん、熱心ですよ。

活動の様々な場面で議論や工夫をされてきたのですね。では最後にこれまで劇団さくらっ子として活動してきたこと、これからの課題や展望についてお話しください。

山中 平成 11 年に男女共同参画社会基本法が施行され、その後、男女共同参画という言葉が一般にも認知されるようになって 10 年余りです。私自身も日本女性会議や NVEC の研修会にも参加してきましたが、年月が経ち、研修現場でも最初の熱気が感じられなくなりました。以前はぴゅあ総合フェスタでも、私たちと一緒にパフォーマンスを発表する団体が数多くいたのですが、ここ数年は減っていますね。活動を続けるモチベーションを保つことの難しさを感じています。今はまだ、男女が本当の意味で平等になる道のりの途中です。その過程で私たちに何が出来るかですね。

三科 持続して活動するために学校や地域への広報活動もしておりますが、毎年のように呼んでいただきサポートしてくださる団体があることも、私たちが続けられる理由の一つです。どこかで私たちの寸劇をご覧になった方々がお住まいの地域へ口コミで広めてくださったり、ありがたいです。私

ちはそういう方々の前で一生懸命演技する。懸命にやることって不細工なんですよ。でも、だからこそ伝わることってありますよね。会場が一つになったときの達成感がよるこびです。私たちのテーマが皆さんの心の中に留まってほしいと願っております。

平井 私も今出来ることをとにかく一生懸命やることだと思っています。たとえば、『女性が会社を変えるとき〜職場編』という作品ですが、初演が平成 19 年、それから 7 年が過ぎて、今年のぴゅあ総合フェスタで再演しました。

7 年過ぎて感じるのは、状況があまり変わっていないということです。もちろん私たちの活動だけでなにかが変わるということではありませんが、これからもコツコツと続けて活動していかなければとあらためて思います。そうすることで、いつか実っていくと思いますので、これからも前進する劇団さくらっ子をよろしく願いいたします。



ぴゅあ総合フェスタでの公演